

張家界市に入ってトイレ休憩のあと、武陵源のホテルに向う。市内中心部から武陵源まで約30kmあり、夕方6時過ぎに凱天国際酒店に到着した。

さてこの張家界市だが今でこそその名が知られるようになったが、それも武陵源が1992年に世界自然遺産に登録されてからという。市内にはあまり観光スポットもなく、1ヵ所だけ観光した「土家風情園」について最後に書き加えたい。「土家」とは土家族という少数民族の名である。

市の人口は約160万人くらいだがその70%強は前述の苗族、そして土家族、白族などの少数民族の人々だ。この市の名前の由来は、漢の建国の功臣であった張良が、初代皇帝となった劉邦が建国後に同僚を次々と粛清していくのを見て危険を感じ、この地に逃れ仙人となったという伝説から来ているという。ただ彼の墓はこの武陵源の一角にあるらしい。

ホテルで夕食をとっていると、ガイドが「8時から苗族と土家族合同の民族ショーがあるので希望者は7時半にロビーに集合して下さい」と皆に伝える。入場料は200円で、少し高いかなと思ったが、折角ここまで来たのだからと行くことにする。2名を除き、皆ホテル前のバスに乗り込んだ。2名は「今日(4月30日)は、上海世博会の開会式なので部屋でテレビを見る」と言っていた。

会場は、野外ステージで観客席も300人は優に座れるくらい大きい。着くとすでに100名余り座って待っている。あっちでもこっちでもおしゃべりがうるさい。8時になったので始まるかなと思うとなかなか始まらない。8時過ぎても次々と客が来るのだ。別に時間に遅れたからといって急ぐ風でもなく、人の前でも平然と横切っていく。

日本人は時間に几帳面すぎるのだと逆に自分に言いかけたくなるくらいだ。結局8時半すぎに始まった。野外ステージは自然をうまく利用して作ってある。三方が崖のように切り立っており、崖の一ヶ所に大きな滝が流れ落ちている。ショーは1つのストーリーとなっ

ていて、結婚あり、戦争あり、最後は皆平和に過ごす日々が実現するというものであり、実際のこの地方の民族の歴史をふまえた構成という。

最後に身体を鍛えた若者が観客の面前で横になり、厚さ15cmくらいの本物の長いコンクリート板を体の上に3枚重ね、その上に7人も乗る。ハラハラする出し物で幕を閉じた。一時間半の素晴らしいショーで200元は安いなと思いつつ出口に向った。

翌朝9時にバスに乗ったが、まもなく武陵源の入口に着いた。入口付近は広場になっていて、8層くらいの塔に大きく「武陵源」と表示板が掛かっている。ゲートに2日間有効の入場カードをさし込んだあと、次は親指の指紋までとられて中に入る。犯罪者扱いみたいで、あまりいい気持はしない。ゲート内にいるバスに乗り換え

て20分くらい走ったところからロープウェーに乗り込む。何しろ山奥の自然遺産なのだから簡単にはその姿を見せてくれない。ロープウェーは一気に上昇していく。高所恐怖症の私としては下を見ないで遠くを見るようにする。景色も急に変化し、写真で見る天を衝くような岩峰が少しずつ視界に入ってきた。

武陵源風景区は、湖南省北西部に位置し、総面積は264km²と広大だ、この景勝地は大きく「張家界国家森林公园」(中国最初の森林公園である)、「索溪峪自然保護区」、「天子山自然保護区」の三つに区分されている。自然が創り出した3000以上の奇峰が雨後のタケノコ状に連なる大原始林地帯である。このうち243峰は何と千mを越えるそうだ。想像を絶するすごさだ。

ロープウェーからようやく下りてガイドの説明を聞きながら歩きはじめる。いくつかの目立つ岩峰にはそれぞれ名前がついている。筆が立てられたような「御筆峰」、仙女が花を捧げているように見えると説明があった「仙女散花」などを見て賀龍公園に向う。そこには真黒い巨大な銅像が立っており、観光客を睥睨している。

中国各地で大きな毛沢東像を見るが、この像が中国最大の彫像といわれている。この銅像は「賀龍」という人



賀龍公園の中にある中国一大きい賀龍の銅像

物で、中国建国時の十大元帥の一人である。日本ではあまり知られていないと思うが中国では有名だ。この十人に入るには、1927年8月1日の「南昌起義」に参加していることが必須条件である。その後共産党にいかん貢献をしても十人の中に入れない。賀龍も湖南省の人だが、出身は張家界なのであろうか。

ちなみに「南昌起義」とは毛沢東率いる共産党が蒋介石率いる国民党政府に対抗するため、武装蜂起（中国語で“起義”という）を行い江西省にある南昌市を占領したことをいう。8月1日に武力占領が成功したことにより、8月1日を共産党の「紅軍」の建軍記念日としている。

賀龍公園を後にして、次々と展望台に案内されるのだが、手すりはあるものの、断崖絶壁ばかりで足がすくむ。平気で手すりに寄りかかり、下を見る人がいるが、私にはこのような神経は理解できない。もし落ちたらと考えないのであろうか。数ヶ月前だったかナイアガラの滝の手すりに座り、写真を撮ってもらって戻るときにバランスを崩して滝つぼに落下した日本人女性が報道されたが、危険なことは危険なのである。

どの展望台に立っても、遥か向こうの地平線まで奇峰、雄峰が連続する様は、確かに世界自然遺産に相応しい。これだけの景観に匹敵するところは世界にいくつもあるであろうが、私はアメリカのグランドキャニオンしか知らない。武陵源のあたりは3億数千万年前は海であったというのだから自然の営みはすさまじい。太古からの地球の息吹が聞こえて来そうだ。今この迫力ある景観を見ることが出来る我々は幸せである。

今回我々は「天子山自然保護区」からスタートしたが、ある地点でマイクロバスに乗り、次の「張家界国家森林公园」に向う。乗ったのはいいがカーブの多い道をカミカゼ運転されるのには閉口した。私の足は無意識

に何度もブレーキを踏む。これでよく事故が起きないものだ。「安全第一」などという言葉は中国国内では根付かないようだ。

今日は5月1日で黄金周（ゴールデンウィーク）の初日であり、天気もいいので人出も半端でない。中国が経済成長するのもうなすける。昼食は山の中腹にあるレストランで摂ったがここもかなり込み合っている。バスでゆられすぎたのか食欲はさほどない。食後いよいよ大ヒットしたアメリカ映画「アバター」のあの山が見える展望台に移動。その場所には映画のパネルが置かれ、それを見るとアバターは「阿凡達」と中国語で書いてあった。鳥の背に乗って石柱群の中を飛び回るイメージを存分に思い浮かべることができた。

奇峰を見あきるとらい見たあと森林公園地区の最後は360mの高さを上下するエレベーターで下りる。東京タワーより高い所から一気に下りるわけだし、ガラス張りなのでこわかったが、下界に降り立ったときは正直ホッとした。しかしよくこのような場所にエレベーターを設置したものだ。「百龍天梯」という名のエレベーターだそうだ。

そこからバスに乗り、索溪峪自然保護区の中の「十里画廊」というエリアに向う。10分も走ったであろうか。そこに電車の駅がある。「十里画廊」観賞用の電車だ。「百龍天梯」といい、この観賞用電車とい



展望台からの「武陵源」の眺め



映画「アバター」に使われた岩峰

い、これだけの山奥によく作ったものだと感心する。電車の線路の左右はさまざまな形の巨大な石柱があり、まるで画廊で見る感じで楽しむようになっていく。線路と並行して徒歩のコースもあり歩いている人もいる。有名な柱は「採薬(薬)老人」と「三姉妹」という。要は石柱を何かに見立ててネーミングしているわけだ。ガイドが説明しても、そのように見えないものもある。要は自分で勝手に想像すればいいのだが。「採薬老人」という石柱は薬草をとってそれを背負う老人に見えるというのだが、何もそこまでこじつけなくてもよさそうなものと思った。でもこのような楽しみ方もあるのだろう。武陵源の1日目はここを見てようやく終りを告げた。連続するあまりの迫りに頭がくらくらするくらいである。

2日目は、索溪峪自然保護区にある「宝峰湖」に行く。誰かが湖と岩山との風景がベトナムのハロン湾に似ていると言っていたが、私はベトナムに行ったことがないのでよく分からない。ここは船に乗ってゆったりと下から巨峰群を見られるのである。巨峰には大きな木がいくつも生えており、当初は1本の木さえなかったであろう石柱が緑におおわれるにはいかほどの年月を要したであろうと思わずにはいられない。

ここでも苗族と覚しき男女が歌の交歓をしている。とても長閑で、世俗のアカに染まらない原始的な風景である。湖上をすべるように半周して船着場に戻る。次に、昨日は張家界国家森林公园内で上から下を見る風景であったが、今日はこの森林公園の中にある金鞭溪エリアを散策するコースで下から上を仰ぎ見ながら歩く。頬に風の戦そよぎを受けながら歩く。全長6kmの川沿いの散歩道をゆったり歩く。時の流れがずいぶん遅く感ずるくらいである。

途中魯迅の横顔に見える岩山や金鞭岩という名の表面がつるつるした岩峰を見る。そのうち民族衣装を身につけた苗族や土家族の娘さんと一緒に写真をとる場所があり、人だかりがしていた。聞いてみると1回10元という。

かれこれ1時間半くらい歩いたであろうか。出口に着いたので全員そろそろのを待って記念撮影。そしてバ

スに乗り込む。いよいよ武陵源ともお別れする時が来た。まだまだ見ていないところも多いが、皆充分満足した顔をしていた。

我々が見た武陵源は2日間とも快晴で遙か遠くまで見渡され、そのスケールの大きさに感動したが、ガイドによると霧がかかった山水画の世界も素晴らしいそうだ。かなわぬ夢であろうが、もしもう一度訪れることが適えば霧の武陵源をこの目で見てみたい。

バスは市内に向け出発したが、この日の最後は「土家風情園」だ。ここは土家族の聖地でもあるそうだが、彼らの生活ぶりがよく分るように建物が配置されている。散在していた彼らの建物を15年前に移設して作りあげたという。

特に黒っぽい9層の木造の建物は斜面に建てられ、天に昇る龍のイメージがあり、その大きさと構造に圧倒される。一番上まで階段が付いていて、最上階から見る風情園の美しさはとても印象的であった。この建物の前が広場になっていて、午後5時からショーがあるというので見学した。中国の少数民族はテレビでもよく紹介されているが、特に



民族衣装を着た土家族の女性たち

女性の民族衣装はデザインといい、色合いといい、数千年の歴史を充分に感じさせるものである。パリのファッションショーもいいが、ここでのショーの衣装の方が私にとっては素晴らしい。美しいというだけではなく、歴史を感じさせ、そこで生きているという生命感と絆ともいえるものを見ている人に与えてくれる。

この風情園には観光客用のレストランがあり、6時半から皆で円形のテーブルについて食事をした。土家族の料理は素朴だが、心に残る美味しい料理であった。メインディッシュ(?)は「杀猪菜(杀=殺)」シヤースーツァイといってブタのいろいろな部分を入れたナベ料理であった。血をかためた料理も出たが、私はどうもこれは苦手である。旅の楽しみのは行った先々でのその地方の料理を堪能できることである。風景に酔い、酒に酔い、少数民族の存在感に酔った2日間であった。

芙蓉の国・湖南省の旅はいよいよ終りに近づいた。バスは窓に皆の顔を写しつつ張家界荷花機場に到着した、そして午後11時、春秋航空8872便は我々を乗せて上海に向けて飛び立った。